“GREAT”なミーティングの条件

産業技術総合研究所・バイオメディカル研究部門
廣瀬　哲郎

参加してよかったとしみじみ思える学会とは、どのようなものでしょう。何と言ってもサイエンスのクオリティ、プログラムの構成、それにロケーションも大事ですね。あとは食事がよかったとか、スタッフがフレンドリーだったとか、コンフェレンスバッグがかっこよかった、とかそんなところでしょうか。日本人にとって忘れてならない“時差”の問題もあります。私もこれまでいろんな学会に参加しましたが、すばらしい学会にはなかなか出会えないでいました。アメリカで開催される学会では、多くの場合、食事にだんだん辟易してきます。毎食懲りずに出てくる“マカロニサラダ”はいったい何なのかといつも思うのですが、何故か昔も今も健在です。一方ヨーロッパに行くと、旧市街地が恐ろしく入り組んでいて会場までたどり着けなかったり、宿舎のシャワーからかすかな霧しか出なかったり、ヨーロッパらしくいろいろあります。それもまた一興、と思い出に変えるのがよいのでしょう。

そんな中で、2013 年 2 月に参加した Lorne Genome Conference は、いろいろな意味でベストに近い学会だったように感じています。紙面をお借りして、学会の様子を少しご紹介します。Lorne は、オーストラリアのメルボルンから大陸南岸に沿って延々と続くドライブルート“GREAT Ocean Road”を２時間ほど行ったところにある小ぢんまりとした保養地です。ミーティング会場は、その街きっての保養施設で、あざやかなグリーンの芝生広場の中に白壁の宿舎が点在しており、その前方には、ボンダイブルーの海がどこまでも広がっていました。この海は“南極”まで広がっているのです。２月の南半球は、まだ夏の盛りにあるようで、まばゆい太陽の光にあふれていました。

宿舎からの美しい眺め。バルコニーにやってきたコッカトーと南極まで続く海。

今年のオーガナイザーは、Archa Fox、彼女は 2002 年に哺乳類細胞の新しい核内ボディを発見し、“パラスペックル”と名付けました。私たちがここ数年間研究している、特に RNA 研究者にとっては興味深い構造体です。芝生広場でのウェルカムディナーに続いて、2 日目から本格的なセッションが始まりました。Lorne Conference のプログラムでは、20 名程度の世界中の一線の研究者による招待講演がオーラルセッションの中核をなし、地元オーストラリアやニュージーランドの研究者がその合間で講演する構成になっています。そして夜にはポスターセッションがあります。このミーティングは “ゲノム”がメインテーマですので、RNA だけでなく遺伝子発現から集団遺伝学に至るまで、普段聞けないようなバラエティーに富んだ講演を聞く事ができました。もっとも今年は、RNA に関する先鋭的な講演が多かったようです。中でも印象深かったのは、マックスプランク研究所の Ingrid Grummt による rRNA locus の発現制御に関わる lncRNA の作用機構について、コーネル大学の Samie Jaffrey の mRNA の N6-メチルアデノシン修飾の話、そして圧巻だったのは、ミーティングの最後を飾った Joan Steitz によるウィルス ncRNA に関するプレナリー講演でした。いずれも新しい RNA 研究のマイルストーンになるような“その先の一手”が仕込まれていました。こういう話を聞くと、誰かによって作られたシェルターの中で安穏としていてはいけない、と落ち着かない気分になります。その外側の不安定空間に“勇敢に”飛び出さなくてはいけないと。

宿舎からの雄大な日の出。

Lorne Conference では、何人かのオセアニアの RNA 研究者に会いました。皆質の高い仕事を着実にしている印象を受けました。アメリカの一部の先鋭的な研究者ほどの迫力はないにしても、私たち日本人がミーティングを通して仲良くなり、心を開いて付き合っていけそうな良識ある研究者が多い印象を受けました。現地の学生さんとのランチテーブルでは、比較的大人しく真面目な学生さん達に会いました。私の知っているどこか抜け目ないアメリカの学生さんと

は大分異なる印象を持ちました。日本の学生さんが、海外ミーティングに参加して現地の学生さんと知り合いになり、サイエンスを含めた諸々のことを腹を割って話すというのは、なかなか敷居が高そうに感じますが、ひょっとしたらオーストラリアは、そうしたことを初めて実践するには、よい土地柄だと思います。日本の若い学生さんは、アメリカやヨーロッパのミーティングだけでなく、オーストラリアにも目を向けてみることをお勧めします。そして“勇敢に”飛び出してみてはどうでしょう。 そして周りの人に話しかけてみてはどうでしょう。

ミーティングを含めた今回の旅行を通して、私はオーストラリアがすっかり気に入ってしまいました。旅行中に出会った人々は、みんなマイルドで温かく、とても親切でした。ドライブのマナーもとてもよく、ハイウェイ上でもみんな静かに走っていました。アメリカ東海岸のアグレッシブなドライバーとはずいぶん趣が違いました。唯一戸惑ったのはこの旅行の起点となったメルボルン街中での“交差点”でした。メルボルンは大都市ですが、路面電車が網の目のように走り、ヨーロッパの風情が漂う美しい街です。この中心部の“シティ”と呼ばれる地区の交差点では、しばしば奇妙な光景が見られます。右の写真にあるように、交差点で“右折待ち”をしている車は、明らかに直進レーンの“左側”で信号待ちをしています。これはメルボルン名物 “フックターン”というもので、正面の信号が赤に変わり、横の信号が青になる瞬間に右折を敢行しなくてはなりません。初心者は、ここでも“勇敢に”飛び出さなくてはなりません。

メルボルンシティ名物“フックターン”。道路標識（吊板と電光板）が写っている。右折車は道路左側に寄って待っている（路面電車の走行を妨げないためだそうです）。

最後にLorne Genome Conferenceは、果たして“GREAT”なミーティングであったのか、総括してみたいと思います。第一にサイエンスの質：“A”、ミーティングの構成：“A”でよいでしょう。食事はどうかというと、このミーティング

特有の工夫がされていました。つまり会場内でマンネリ化する食事（例：マカロニサラダ）を出し続けることなく、食事ごとにいろいろなメリハリがつけられていました。最後の夜には、Lorne の街中のレストラン何軒かを借り切って参加者がディナーを食べに行きました。よって食事も“A”。ミーティングスタッフ、そして他の参加者もみんなフレンドリーで親切でした。ポスター会場でも多くの人が気軽に声をかけてくれました。兎角ありがちなギスギスした探り合いみたいなものがなかったのが、とても心地よく感じました。よってこの点も“A”。あとは・・コンフェレンスバッグ・・・まあこれはどうでもよいでしょう。そして忘れてはいけないのが、時差ボケがないスッキリとした気分でミーティングを迎えられるすばらしさ、極東に住む私たちにとって何物にも変え難いアドバンテージでしょう。よってここには“+1”。もう一つ言わずにはいられないのが、夜ポスター会場を一歩出て見上げたすごい星空、初めて見たサザンクロス、上下が逆さのオリオン座、カノープス、そして無数の星たち。これらにも“+1”。そして最後に Archa Fox がわざわざランチタイムに連れていってくれたユーカリ林のコアラたち、会場周辺に大音響とともに飛来するカラフルなオウムたち（モモイロインコやコッカトー）にも、“GREAT”なオーストラリアを感じました。ここにも“+1”。

観光案内所で見つけたオーストラリアの GREAT な生き物の図

　こうして今回の Lorne Genome Conference (http://www.lornegenome.org)の評価は、めでたく AAA+++となりました。

日本 RNA 学会会報　(2013.5) より